

四、学校・教師はいじめ体質から脱け出よう

——イジメ自殺事件に因んで——

昨年十月、福岡県筑前町でいじめを苦にした中2男子生徒の自殺事件が生じ、それをきっかけに、教師による生徒いじめの問題がにわかに大きな教育社会問題として取り上げられるようになった。当時、文部科学省はもとより、法務省人権擁護局までが乗り出し、事件究明の流れは学校・教師の生徒に対する人権侵犯問題にまで展開していった。

それにしても、この件に対するマスコミの姿勢は凄まじかった。某テレビ局はカメラを向けて当該教師を執拗に追及し、「一生をもつて償う」とまで言わしめ、某週刊誌は「生徒を『自殺』に追い込んだ『いじめ教師』の素顔」と題し、まるで本人が直接の犯人であるかのように責め上げている。皮肉なことに、このマスコミの行為こそがいじめそのもの、また人権侵犯行為そのものなのであるが、近年、学校でことが起ればみな学校・教師の責任ばかりが問われる時代になっている。九年前の栃木県黒磯市における中1男子生徒による女教師殺害事件では、世間の声は加害者の生徒に対するよりもむしろ被害者である教師に対して厳しく、あろうことか、一部のマスコミと一部の大学人が、彼女の誤った対応が生徒をあたらし、殺人者に駆り立てたのだ、と本来痛恨の悼みと共に弔われるべき被害教師を、かえって「加

害者”として糾弾した。

学校・教師に対するこうした世間やマスコミのあり様はいったい何事であろうか。まさに非道と言うほかはない。反論もしたくなるだろうし、また言い訳もしたくなるだろう。実際、教育の現場からそうした声を少なからず聞く。しかし、今はそのようなこと、けっしてなすときではない。かつて松本サリン事件における悲惨なる被害者・河野義行氏が言い訳無用とばかりに連日連夜“真犯人”として過酷な攻撃に晒されたことを思い起こせば分かるように、世間やマスコミなどというものは所詮は無道で不正義。理屈をもって抗しても百害あって一利無いということもあるが、言われるところの教師による“生徒いじめ”が無いかと言えば、それを否定できない厳粛な悲しい現実があるからである。また、そこから子どもたちを様々な形で傷つけ、深刻な適応障害の源となる強いストレスやフラストレーションを生み出しているからである。今、学校・教師が為すべきは、まさにこの点に関わっている。

私は生徒に対する教師のいじめ問題を早くから「学校・教師加害者論」として捉え、三つの態様に分けている。一つは「作法的いじめ」で、例えば、反抗的で不勉強な生徒に、こうした生徒にこそ暖かい眼差しを向けていかねばならないはずなのに、それどころか、“示し”をつけるという意味で授業中の質問時にあえて本人を飛ばして前後左右の生徒を指名したりすることである。二つは「不作為的いじめ」で、不従順で気に入らない生徒が、その特異な性格・行動故にいじめを受けあるいはいじめを受けることが予測されるのに、その欠点を矯

正する手だてを講じず、いじめの発生や進展を見て見ぬふりをするのである。三つは「結果的いじめ」で、しつけや動機づけと信じて、安易な欠点指摘や無用な信賞必罰などを行い、知らぬ間にいじめの標的になり易い子どもをつくり、あるいは無用なストレスやコンプレックスを生んでいじめ発生の土壌を創り出すことである。

これら三つの「生徒いじめ」に関して、よくよく内省すれば、自信をもってすべてにノーと言える教師は決して多くはないはずである。となれば、教師集団の中に「生徒いじめ」の体質が普遍的状況として存在することが強く示唆される。そしてこの土壌の中から、大きな生徒間いじめ事件が発生し、やがて被害者が深刻な精神破壊に追い込まれ、一つの結果として自死にも至るといふ構図が見えてくる。一九八六年の東京都中野区で起きたいわゆる「葬式ごっこ」事件における中2男子のいじめ自殺、一九九四年の愛知県西尾市で起きた「かつあげ」事件における中2男子のいじめ自殺、そしてこの度の福岡県筑前町でのいじめ自殺事件など、みなこの構図の中にある。こうして、直接的加害者とは言わなくても、遺憾ながら、たくさんのいじめ事件といくつかのいじめ自殺事件の間接的加害者として教師は必然と関与しつづけている。

このように見てくれば、ことあるたびに生じる世間・マスコミからの「学校・教師いじめ」に対して、学校・教師が闇雲に反論し抗弁することなど、とても許されることではない。代わりにまず行うべきは、すでに明らかのように、この外からの攻撃を契機に自らの内にあ

る“生徒いじめ”の体質を自省・自戒し、一日も早くそこから脱却することである。もし学校・教師が真に教職の専門集団であるなら、必ずやこれを行うであろうが、まさにこの姿勢こそ、児童生徒ならびに親たちの信頼を呼び戻して彼らとの関係修復をなし、荒れた学校の再生を実現していく王道である。

“いじめ体質からの脱却”、これは同時に、学校・教師に対する不信と絶望の中で尊い命を自ら絶つていった子どもたちに対する弔いであり、また責務でもあらう。

（『教育時評』『琅』2010年）

五、「毅然たる指導」は権力主義の源

——教育再生会議の提案に因んで——

「教師による児童・生徒へのいじめ」問題の大騒ぎが静まる中で、混乱する学校教育問題の核心がどこにあるのか、次第に認識されるようになってきた。即ち、いじめ・暴力・学級崩壊など、学校教育を混乱の極みに追い込む反社会的な子どもたちと、それに対応する教師の指導力不足の問題である。そして世論は今、教師の「毅然たる指導」を求めて声を合わせて盛り上がりつつある。因みにそれは、公教育再生を目的とした政府の教育再生会議でも重点